

きもだめしのはなし

むかし、若い者がおおぜい集まって、

「今夜、ひとつ、きもだめしをしないか」ということになりました。

「どこでやろうか」

「明神山に登ろう」

「よし。明神山のてっぺんまで登ることにしよう。とちゅうで帰つてきたらだめだぞ。てっぺんまであがつて帰つてきた者に賞金だ」

「うん、そうしよう」と、話がまとまりました。

夜になると、みんなは村のお宮に集まって、くじ引きで登る順番を決めました。

一番くじを引いた者が、まず出かけて行きました。明神山のふもとまで行って、そこのから登りはじめたのですが、なにやら、からだがすうすう寒くなつてきました。

（これはいかん）と思いながらも、しんぼうして、一合目くらいまではどんどん登つていきました。ところが、そのうち、寒くてがまんできなくなりました。

（これは帰つたほうがいいぞ。かぜをひいたらつまらない）と、山をおりました。お宮にもどると、みんなが、

「どうしたんだ。えらく早いなあ」といいました。

「それがな、こわかつたわけじやない。寒くつて帰つてきたんだ」

「なんだ、つまらん」

つぎの者が、

「こんどはわしの番だ」といって、でかけました。

「先のやつは、おくびょうだなあ。あんなに早くもどつてきて、はずかしくないのかなあ」と、ひとりごとをいいながら登つていきました。どんどん登つていくと、なるほどからだがじこじこ寒くなつてきました。

（ほんとに寒いぞ。あいつのいったとおりだ）

そう思いながらも、

（もうちよつと登つてみよう）と、四合目あたりまで登りました。ところが、寒くてからだがじんじんしてきて、どうにもなりません。

(これは、とても登られん)と、山をおりました。

みんなは、

「おまえもだめだつたか」といいました。

「どうにもわけがわからん。おまえが行つても、きっと登れないぞ」

「そうかなあ。まあ、とにかくいつみよう」と、三人目がでかけていきました。
どんどんいきおいよく歩いて、五合目くらいまで登つてきました。

「(お)まできたら、あとひと息だ。ちょっとといつぶくしよう」

男は、たばこを出していつぶくしました。そのとき、山の上からものすい風が、ザアアーンとふきおろしてきました。寒くて寒くて、

(これはたまらん。身の毛もよだつて、こういうことだ)

そう思つていると、また風が、ザザザアーンとふいてきて、髪の毛が一本のこうずさか立ちました。

(これは、とても登られん。帰ろう)と、山をおりました。

だれもてつぺんまで登ることができません。とうとう、さいのひとりになりました。
「おまえたちみんな、おくびようだなあ。おれが登りきつてやる」

どんどん、どんどん走つて、五合目をすぎ、七合目まで登りました。そうしたら、い

きなり、ものすごい風が、ふきおろしてきました。月は雲にかくれて、まつからやみです。

そのやみのなかから、ザアザアザアときみような音が聞こえきました。

「いよいよでるぞ。なにかでてくるぞ。ようし」と、どきようを決めてじつと立つて目
こらました。すると、目の前に、「あああー」とせりんと、髪ふりみだしたおばあさん
があらわれました。

(あの風はこいつのせいだな)と思つて、じいつと立つていました。すると、おばあさ
んが、

「おまえはだれじや」といいました。

「だれでもいい」

「ほう、おまえはどきようがあるのう」

「それは知らんが、おまえはどうして、こんなことをして人をこまらせんんだ」
おといがきくと、おばあさんは、

「わしは、人をこまらせているわけではない。わしはただここに住んでいるだけだ。おまえらが勝手にこまつて いるんじやろう」といいました。そして、

「さてと。では、今夜はおまえを食うとしよう」といつて、大きい口をわああつとあけました。男が、「ぎやあああ」といつて、よく見たら、おばあさんの口のなかには歯はが一本もありませんでした。

「あ、こいつ、はなしだ」歯がなくて、はなし。

おしまい。

原話 ..『千代田町昔話集』 大谷女子大学 説話文学研究会
再話 ..村上郁